



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	『通言総籙』をめぐる江戸座俳諧：石原徒流と吉原仲の町茶屋主人の俳諧活動
Author(s)	鹿島, 美里
Citation	国語国文研究, 129, 57-70
Issue Date	2006-01-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93536
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_129-57-70.pdf



『通言総籙』をめぐる江戸座俳諧

——石原徒流と吉原仲の町茶屋主人の俳諧活動——

鹿 島 美 里

一 『通言総籙』にしろされた俳諧

『通言総籙』（天明七年刊・山東京伝作）の本文において、『江戸生艶気樺焼』で有名になった登場人物の艶二郎と北里喜之介、わる井しあんの三人で、吉原のうわさ話に花をさかせているが、そこに注目すべき会話が指摘できる。

ママ

ゑん 琴基書画をやるきだの。傾城にもいろ／＼なくせがあるものだ。（略）わかづるが俳諧、（略）九重がかふろの外に男の子をかゝへておくことなどは、今でのがちだ

しあん こんちう今戸の墨賀が寮へめへりやしたら、いづゝ屋のせつべい、くわれき松屋のぎよみん、いづみやのこゑん、いの字いせ屋のせいら、長崎屋のこはん、おはりやせつ久、かんぼ

くといふ医者、宗匠のとりう、なぞがきていて、梅枝点のばいしとはす俳諧がはろが事也をしていやした。

艶二郎は傾城の諸芸をよく知っており、それを並べて得意になっている。これに続けてしあんが、浅草今戸町の墨賀の別荘へいった折、吉原仲の町茶屋の主人達が、梅枝の俳号を持つ遊女菅原を点者として俳諧をしていたという話をする。ここから吉原の遊女が俳諧をたしなみ、仲の町の茶屋の主人達には俳諧グループがあつた事をうかがわせるのである。また『通言総籙』には早稲田大学図書館に山口剛氏旧蔵の当時の通人による書き入れ本（以下、「早大本」と略記）の存在が知られており、神保五彌氏が「洒落本の書き入れ」（『近世研究と評論』一号、昭和四十六年十月）として紹介された。¹⁾早大本の書き入れはモデルが実在の人物である事を指摘しており、洒落本解釈の手懸かりとして重要なヒントを与えてくれる。前掲引用部分については、次のような書き入れがある。

若つるはとりうが門弟

墨がは扇屋の宇右衛門はい名

雪幣は孫次郎 漁民は庄兵衛 こゑんは忠兵へ せいらは九十

郎 雪弓は太郎兵衛

かんぼくは 亦けんぼくは

『通言総籙』の本文とここにあげた早大本の書き入れからヒントを得て、吉原での俳諧活動がどのように行われていたか、茶屋の主人達、そして俳諧宗匠「とりう」の位置付けを説明していきたいと思う。従来、山東京伝はスキヤ連の狂歌師として、狂歌連という枠組みの中でとらえられ、江戸座俳諧に關係した人物としてはあまり言及されてこなかった。京伝を吉原仲の町茶屋の主人達と江戸座俳諧との関わりの中で新たにとらえ直していきたい。そこには大名の子弟との関わりも発見することになる。

二 「宗匠とりう」と江戸座俳諧

『通言総籙』の前掲の本文によれば、吉原仲の町茶屋の主人に交じり、宗匠の「とりう」なる人物が登場している。この人物が吉原茶屋の主人と江戸座俳諧の關係を結びつける大きな鍵を握っていると考えられる。先行研究によれば江戸座俳諧の宗匠石原徒流であるとする説と、姫路藩主酒井忠以の弟、酒井忠因こと酒井抱一とする両説があげられる。まず一人目の石原徒流については『近世人名辞典三』において「徒流 俳 天明頃「洞房語園異本考異」二巻あり」

と記される人物である。石原徒流は『洞房語園異本考異』の所々に俳諧の宗匠らしく自らの発句を載せている。また『新選俳諧年表』

(平林鳳二・大西一外著、大正一二年)においては文政八年の項に「徒流歿、八月九日、石原氏、吟花庵、可来庵、風弧坊と號す、存義門、江戸人」と記載され、徒流が存義門に属していたことを示す。向井信夫氏と佐藤要人氏は『日本随筆大成第三期二』の解題と付録で『洞房語園異本考異』の編纂増補を行ったのは石原徒流であり、徒流なる人物は馬場存義門の江戸座の俳諧点者、耳洗庵、石原徒流であると説明を加える。佐藤氏は『通言総籙』の「とりう」はこの石原徒流であると指摘し、水野稔氏も同様に『新日本古典文学大系85』(岩波書店、平成二年)の脚注で「江戸座の俳人徒流か」とする。徒流なる人物は、吉原に出入りしていたからこそ『洞房語園異本考異』の編纂増補が行え、俳諧宗匠の「とりう」として有名な人物だったと考えられるのではないだろうか。これに対し井上隆明氏は『朝四大尽と晩得』(近世風俗研究会、昭和五二年)で、吉原鶴屋の遊女菅原を点者とした俳諧遊びに、屠龍は茶屋の主人らと加わっていると説明する。この屠龍とは酒井抱一の俳号であり、井上氏は「とりう」を抱一とする考えを示す。「とりう」は石原徒流であるのか、酒井抱一であるのか、それぞれの人物について検証を加えて明らかにしたい。

石原徒流なる人物は天明六年序の『誹諧鰐』八編に「独立 吟花斎 原徒流」として独立の業俳として登場する人物である。ところが、寛政元年序の『誹諧鰐』十編では存義側分派の江戸座鶏口側に属しているのである。鶏口側の中では小知・秀国・宗文・寛美・蓬

雨・素月・徒流の順で出る。その後も『俳諧鰯』十一編（寛政四年序）に江戸座鶏口側「風瓠坊 原徒流」、十二編（寛政七年序）に江戸座鶏口側「風瓠坊 原徒流」として記載される。しかし、また『俳諧鰯』十四編（寛政十年序）で「風瓠坊 徒流一側 石原徒流」として独立になるのである。徒流は『俳諧鰯』十五編（寛政十二年序）、十七編（文化元年序）にも見られる。そして『俳諧鰯』十八編（文化三年序）では、「緑樹庵 徒流一列 楠部秀瓠」という人物に変わって記載されている。⁽⁵⁾徒流は一度、独立の宗匠になったが、何かの事情で江戸座鶏口側に入り、寛政十年には再び独立の宗匠になったと考えられる。

ところで徒流が独立から江戸座の連中に変わるのは、寛政元年一月一七日の『松鶴日記』によって明らかになる。

一 昨日、秀国来り、徒流来二十六日、彼座連入弘めする故、発句請由云。⁽⁶⁾

『俳諧鰯』の記載によれば天明六年に独立の宗匠として立机した徒流であったが、特別の名声があったわけでもなく、宗匠として生活できなかったためか、寛政元年には存義なきあとの鶏口側の連中である秀国の社中に入ったのである。徒流は天明六年から独立立机の宗匠となり、天明六年から天明八年の間独立の宗匠であったと考えられる。つまり『通言総籙』が天明七年正月に刊行されている事から、この時、独立の宗匠をしていたのはこの石原徒流であったと考えられるのである。天明六年に独立立机したわけであり、徒流が吉原仲の町主人や遊女菅原の俳諧の席に出るほどの力がすでにあったと考えられる。また、徒流は『俳諧鰯』に見られた江戸座鶏口側の

人々が入集あるいは関わった俳書にその名が見られる。小知の古希を祝って出した『なゝくき野』（寛政二年刊）に江戸座鶏口側に属する秀国・宗文・保牛・寛美・蓬雨・素月らとともに徒流も祝いの句を連ねている。他にも養子の鶏口が編纂した楼川十三回忌追善集「松の葉」（寛政五年自序）に江戸座鶏口側の、小知・秀国・在転・素月・秀瓠・灌河と並んで入集する。この俳書には他にも鶏口側の蓬雨・泰里が入集し、吉原妓楼主人墨河や、文魚、楼川の名が見える。鶏口側の俳人秀国の歳旦帖「石寿観歳旦」（寛政七年刊）や秀国編の絵俳書「俳諧めつけ絵」（寛政八年刊）にもやはり江戸座鶏口側の人々とともに入集する。享和三年に出された『神田集』は小知の師の白峰翁の志をついで存義側の人々の句を多く集めたものとなっている。小知・鶏口・朝四（佐藤晩傳）や紀逸・墨河・買明・文魚・楼川・田女・楼川の妻、芙天、三世連馬、泰里、其爪などが句を連ね、そこに徒流は入集した。『神田集』が刊行された享和三年には徒流は再び独立の宗匠となっていたが、ここでも鶏口側の人々とともに入集しており、鶏口側の人々との関係の深さが伺える集となっている。徒流が入集する俳書の中で注目すべきは、二世徒流が編纂した、徒流の追善句集『秋の声』（文政九年序）である。この中に、七十歳になる徒流自身が文化元年に書き記した「閑窓隨筆 自序」が載せられており、徒流が俳諧の道に志した自らの生涯を書き残している。これによると、徒流は二十歳を過ぎて俳諧の道を探りはじめ、旧室門下の千里亭江南老人に師事した。そこで其角の調べを慕い俳諧を学ぶも、江南老人が亡くなってしまふ。その後、存義の門に入り、「雲霧を拂青天白日を見ん」と朝に夕に存義に侍座して俳諧の道を極

めようと思うも、また師存義が亡くなってしまふ。徒流は頼る方なく「自立して判者の数に入れる」と独立の宗匠となった。この時がまさに徒流が宗匠となった天明六年であると考えられる。そして、この記述のすぐ後に「神田庵小知が誘ひに江戸座の列に加れど」とあり、宗匠立机した徒流であつたが、鶏口が率いる江戸座に小知の誘いで加つたことが徒流自身の随筆で書き記されている。この時が『松鶴日記』の寛政元年のことと考えられる。江戸座に加つたものの「青眼の友なく其列を辞し神田なる神岳のもとに草の庵を結び、猶有無庵を鑑として」と、江戸座の中では自らが目指すものに到達せず、江戸座を辞し、再び独立の宗匠となつたのである。『俳諧觴』によれば、再び独立の宗匠となつたのが、寛政十年と考えられる。その後は、存義を手本とし、門人に俳諧を教えたと思われる。この「閑窓隨筆」によれば、徒流は江南老人につき、その後、存義門下となり、存義亡き後、宗匠立机するも、小知の誘いで江戸座に加わり、後に再び独立となる経緯が書かれている。『俳諧觴』に記された徒流の俳諧活動は、徒流自身が書き記した随筆と一致するものであつた。徒流は寛政元年から寛政九年まで江戸座に属していた事を考えると、小知・鶏口・秀国が編んだ俳書への入集が多いのは当然であり、寛政以後の俳書に入集する。さらに存義に師事していた事が明らかになつた。ここから、徒流と江戸座の深い関係、存義との俳諧の繋がりが吉原仲の町の茶屋主人との関わりが一層濃くなり、「とりう」が石原徒流その人と考えられる可能性が極めて高いと思われるのである。

では、もう一人の「とりう」として考えられた酒井抱一であつた

とする可能性について見ていきたい。⁽⁸⁾『閑談数刻』丙の酒井鶯邸君の項に記載されるように「俳名○屠龍」とあり、通常「とりよう（とりやう）」と読むが、「とりゅう」とも読むことが出来ると考えられるため、この宗匠とりうではないかと考察が加えられてきた。問題の「とりう」を説明するための手懸かりとして早大本の書き入に「若つるはとりうが門弟」と記されている。この事から遊女若鶴が俳諧を抱一に習つていたことが明らかになれば、「宗匠のとりう」なる人物は抱一ということが出来る。『通言総籙』本文にも「わかづるが俳諧」とあり、若鶴が俳諧を好んでいたことが記されている。若鶴は若松屋のよびだしとして天明七年秋の新吉原細見に見える遊女である。そこで、抱一と若鶴の関係を明らかにするため、抱一がどのような遊女を相手にしていたかを考察していきたい。『閑談数刻』丙には抱一が大文字屋の座敷持の遊女香川（『閑談数刻』では賀川と表記）を身請けしたことが記される。

●小鸞婦人後に剃髪して妙華尼と云。

鶯邸君御召仕、元は大もんじやの遊女賀川。

敬義門人にて書をよくし、茶を好み、俳諧をし、河東ぶし、半太夫ぶしの三味せんを曳。

また同じ『閑談数刻』丙に

●角町松葉屋 半蔵と云 粧、京町大もんじや一元方に遊びにゆかれけり。

とあり、松葉屋の粧や大文字屋の一元のもとに遊びに行き、他にも白玉や大淀といった遊女を相手にしていたことが記される。さらに、この粧は『閑談数刻』四に「和哥発句 鶯郎君」とあり、和歌と俳諧の師匠が抱一であったことが明らかになる。抱一は松葉屋粧のもとに遊びに来るとともに、和歌や俳諧を教えていたのである。向井信夫氏の『江戸文芸叢話』（八木書店、平成七年）によれば松葉屋粧は文化三年から文政元年にかけ吉原に出ていた遊女であるため、天明七年に刊行された『通言総籙』に出る若鶴と違う人物であることが判明する。俳諧を教えていた遊女として松葉屋粧がいたが、抱一が若鶴に俳諧を教えていた記述は見当たらなかった。また『通言総籙』の本文において、抱一は艶二郎に「ときやうさん」と呼ばれている。表記を使い分けている所からも、「とりう」は抱一でないという可能性が高いと考えられる。

結論として言えば、「とりう」なる人物は、『洞房語園異本考異』の編纂を行った石原徒流と推定できる。次に、徒流がここで江戸座の鶏口側に属していたことに注目し、一緒に点取俳諧に興じていた吉原仲の町の主人達とどのように関わり、江戸座俳諧と繋がっているかを考察していきたい。

三 吉原仲の町茶屋の主人達の俳諧活動

『通言総籙』で描かれた吉原仲の町の主人達は墨質の寮に集まって俳諧をしている。この墨質とは、早大本の書き入れに「墨がは扇屋の宇右衛門はい名」とある人物で、吉原一丁目の大籙、五明楼扇屋

二代目主人扇屋宇右衛門の墨河という俳号を当て込んで作品に書かれている。墨河は狂歌では吉原連に属し、狂歌名を棟上高見と称し、蔵前の札差と並んで十八大通に数えられる人物であった。墨河は『閑談数刻』一によると「墨河は別に居間有て茶俳諧に遊ぶ。茶やたいこげいしや勿論其頃の風流人來らぬものなく、日々出入多く」とあり、茶俳諧に造詣が深く、風流人で訪れない者はないと記される程の吉原の文化人であって、墨河の扇屋は吉原文化サロンの役割を担っていたのである。俳諧においては、墨河は秀国編、買明序、祖荷らの画になる江戸俳人の肖像を収めた『江戸の幸』（安永三年刊）に「常盤なる柑子色づくしぐれかな」の句がその姿とともに入集する。『江戸の幸』には存義・鶏口・朝四・楼川・田女・祇徳（二世）・秀国などが入集しており、存義側俳人を集めたものとなっている。在転家集『露月菊』（安永七年刊）では、後述する吉原見番の秀民と、吉原仲の町いの字いせ屋主人の翠羅とともに墨河の句が載せられる。また楼川歳旦帖『己卯さいたん』（宝暦九年刊）にも二句、存義十七回忌追善集『冬木立』（寛政十年刊・三世連馬編）にも一句入集しており、存義側の人物として俳諧をたしなんでいたと思われる。『冬木立』には、くわれき松屋主人と考えられる漁民、泉や主人巨園、吉原見番の秀民が同じく入集する。井田太郎氏によると、墨河は安永・天明期には抱一と親交があつく、泰室（のち春來）とは幼馴染であった縁故があるとする。他にも墨河は、秀国の編纂による月次俳諧の高点付句集三部作『歌之介』（宝暦八年刊）・『歌之介後編 祇園の松』（宝暦八年刊）・『歌之介三篇 ひるを見』（宝暦十年自序）すべてに入集する。墨河の句は『歌之介』では買明点、『歌之介後編

祇園の松^⑤では鶏口の点が付いており、存義の点者でもこれらの人々に関係が深いと思われる。そして鶏口によって編纂された楼川八十の賀の記念集『百福寿』（安永七年自序）に存義・秀国らとともに祝賀の句を詠み、徒流も入集した楼川十三回忌に出された『松の葉』にも句を寄せていた。他にも泰里の父の一周忌追善集^⑥のこるきく（安永八年自序）、存義側点者であった買明の一周忌追善集『俳諧ひとしぐれ』（天明五年刊）や徒流も入集した『神田集』、『続江戸月見』（刊年不明・旨原編）などにも入集する。『続江戸月見』は、鶏口、在軒、小知、楼川、買明、秀国など存義側の俳人が句を並べており、後に考察する吉原仲の町茶屋主人の雪弓、漁民、さらに十八大通で御用達商人の文魚も入集する。これらから、墨河は存義側に属し、存義側の点者であった楼川や秀国・買明・小知・旨原などにつき俳諧を行っていたと考えられる。墨河は妓楼扇屋主人としての立場上、交友関係も広がったと考えられ、楼川の賀や忌日、買明の一周忌などの節目には必ず句を寄せる仲であった。それが多くの俳書に入集していた要因の一つと考えられる。また墨河は抱一だけでなく、風流人が扇屋に集まったと記されるように、京伝とも関係が深かったのである。天明四年に出された北尾政演（山東京伝）画『新美人合自筆鏡』には墨河の扇屋抱一の遊女、三代目花扇と四代目滝川が描かれている。また『通言総籙』本文中にも「いなぎも源氏の書入にこつていやすよ」とあるように、墨河は妻いなぎとともに吉原の文化サロンを形成していた。遊女にも高い教養を身につかせ名妓を作り上げた扇屋は、抱一や京伝などの風流人の集まる場所になったのもうなずける。また山東京伝編画になる『手拭合』（天明四年刊）

には墨河、妻いなぎそして遊女花扇も図案を寄せている。墨河が扇屋を宣伝し、遊女を売り出す戦略が見られるが、京伝がこれほど扇屋を取り上げるのは、後述する茶屋の主人翠羅とともに、吉原における京伝の有力なパトロンであったからだと考えられる。さらに京伝は墨河の勧めで扇屋の番頭新造菊園を妻に迎えていた。『通言総籙』で墨河の別荘で俳諧が行われたとが記されていたが、これらから墨河は俳諧では存義側に属し、その中でも秀国、楼川、買明といった人と関係が深いと思われた。抱一とも親交あつく、京伝の作品にも多く登場し、京伝のパトロンの存在を果たしていたのである。

次に『通言総籙』の本文に登場する吉原仲の町主人達について考察を加えていきたい。ところで京伝の『廓大帳』（寛政元年刊）にも次のような会話が見られる。

〔五〕此あいだはだいぶ。はいかいが世にできました。我物がとこにも定会がたちます。いづみやのこるん。井筒やのせつべい。松やの魚民。などが。いつでも利うんをいたします

『廓大帳』は『通言総籙』の二年後に出版された洒落本であり、ここにも『通言総籙』に登場する吉原仲の町茶屋の主人、巨園、雪幣、漁民が俳諧の定会を行っている様子が書かれる。我物とは、『通言総籙』にも登場し、水野稔氏の『新日本古典文学大系85』の脚注によれば「吉原の暫間の名」と説明される人物である。吉原で俳諧が流行し、吉原暫間の我物の所でも茶屋の主人達による俳諧の定会が催されたと記す。吉原では以前から俳諧の流行が続いており、それを

京伝が作中に描いたのである。それでは、『通言総籙』に書かれた茶屋の主人達はどのような位置で俳諧をおこなっていたのだろうか。

『通言総籙』仲の町の主人達は本文中ですべて俳号によって呼ばれている。本文中に登場する「くわれき松屋のぎよみん」は、早大本の書き入れに「漁民」とある人物で、吉原仲の町のくわれき（花礫）松屋主人、松屋庄兵衛であり、俳号を「漁民（魚民）」と称した人であった。漁民は河野美天が二代在転を襲名する、名びろめ集『辛亥歳旦』（寛政三年自跋）に次のように入集している¹⁰。

春風に蝶よりかろき柳哉

秀民

是からは大商ひや初ゑびす

翠羅

七くさにおぼへよき名の薺かな

魚民

この春は神路山より京内まいりの心うき立て

折を得て鞠子とまりや梅の花

雪幣

ここでは吉原見番の大黒屋秀民と、吉原仲の町の茶屋主人で『通言総籙』に「いの字いせ屋のせいら」として登場する、いの字いせ屋の主人、俳号「翠羅」、「いづゝ屋のせつべい」のみづつ屋主人、井筒屋孫次郎、俳号「雪幣」とともに入集しているのである。ここからも吉原者達が俳諧の連中を組んでいたことが明らかにになる。他の入集者には、連馬・泰里・鶏口・秀国・文魚・左達などがいた。さらに注目すべきは『辛亥歳旦』に美天が在転の名を襲名することを喜び、徒流が鶏口側の俳人蓬雨・素月・小知らとともに入集していたのである。在転も鶏口側の俳人であり、『通言総籙』の本文にある

ように、茶屋の主人達と徒流が同じ鶏口側の俳諧グループに属していることが明らかになった。『通言総籙』の内容と『辛亥歳旦』に入集した茶屋の主人と徒流の関係が、深く結びついたのである。ここに登場した秀民こと大黒屋庄六も、吉原者として茶屋の主人達と同じ俳諧グループに密接に関わっていたのである。この秀民とは、明和ころ初めて吉原芸者を管理する見番を設立し、吉原では重きをなした人物であった。秀民は、心祇一周忌追善集『玄冬集』（明和元年刊）にも、十八大通の文魚、暁雨とともに入集する。心祇は初代暁雨と同族であり、浅草蔵前の札差であった。また先に述べた墨河が入集した『江戸の幸』に「長き夜を四つの音じめやきりぐす」の句とともに琵琶を奏でる秀民の姿が描かれている。『江戸の幸』は、存義側俳人を集めたものだが、ここには、十八大通の文魚、左達、祇欄も入集している。このうち祇欄は蔵前札差を業としていた。秀民という人物を考える時、十八大通としての繋がりが大きく浮かび上がってくる。そして旨原著の『風月集』第六卷（安永五年序）にも入集している。旨原は存義側点者の一人であり、また『風月集』六卷には朝四も入集する。ここには、十八大通の文魚、吉原妓楼大上総屋の主人一鷹も入集し、吉原の有力者が存義側江戸座俳諧を支えていたことが読み取れる。そして墨河や茶屋の主人漁民・巨園が入集していた存義十七回忌追善集『冬木立』と、もう一つの泰里編なる存義十七回忌追善集『いとしぐれ』（寛政十年刊）にも、次のように秀民は漁民、巨園、清蘿とともに同じ丁に名前があたり、雪弓も入集する。

手向るや時雨の露を草ながら 雪弓

(略)

芳しき名の跡とふや帰り花 秀民

口切の手向なるらむ茶対箱 魚民

有無の人を言出す時雨かな 巨園

時雨るゝやはたちの人に師の噂 清蘿

両方の存義追善集に秀民は句を寄せることから、存義との関係の深さが伺える。また、文政九年に遊女玉菊百回忌追善が行われ、その折りに出された玉菊百回忌追善句集『もゝ羽がき』(文政九年刊)に「あつまれば露も絵をなす光かな」の句や、さらに耳洗庵徒流の『古事を端居がたりや月更級』の句が寄せられている。『もゝ羽がき』は玉菊の追善供養として吉原にお客を呼ぶためのイベント的要素が強かった。吉原の大切な催しのために作られた追善句集に抱一が序文を寄せる。そこに秀民や俳諧宗匠の徒流も入集した。彼らは吉原になくはならない存在だったと考えられる。他にも先ほど墨河も入集した『続江戸月見』や『俳諧ひとしぐれ』、存義編の『ぬさのものと』(天明二年刊)にその句が見られる。『俳諧ひとしぐれ』にも十八大通の左達が入っているのである。これらの入集する俳書を考え、秀民は吉原者として存義側のグループに属し、心祇追善集や『江戸の幸』に入集する十八大通、四時観連中との関わりを深く持つて俳諧を行っていたことを見逃してはならない。

吉原見番を始めた秀民の吉原における俳諧の位置が分かってきたところで、茶屋、花礫松屋の主人松屋庄兵衛こと漁民について考察

を進めていきたい。漁民は魚民とも表記したと考えられる。『古今吉原大全』(明和五年刊)巻三の中で吉原仲の町に桜が植えられたことを喜んで、仲の町茶屋主人雪弓、初代翠蘿とともに仲の町茶屋主人として句を詠む。他には先ほどみた『辛亥歳旦』や『冬木立』に入集する。これから漁民も俳諧は存義側に属したと考えられる。また蘭室一周忌追善集『天の川』(寛政九年刊・曲笠庵編)に巨園・清蘿とともに入集する。この『天の川』は抱一が挿絵と発句を寄せ、其爪・雁々・晩器など抱一と交流のある人々が入集しているのである。漁民がこれら抱一と関係のある人物と関わりを持っていたことは『輕拳館句藻』『椎の木蔭』寛政八年八月一五日の抱一の日記からも明らかになる。漁民の茶屋花礫松屋で抱一が漁民・其爪・鴈々・晩器とともに句会を開いた折の様子が伺える。

今宵は花礫亭に月を見、いとさやか也。其爪・葦坡・紫寛など来、ともに月を賞す。節蔭法師、琴を弾。主人、三弦を取て、合ものなど、おもしろし

名月や昼見た真間の鶴の台 魚民

有山は東の御堂けふの月 其爪

名月や荷の銭つなぐ油壳 同

月おもしろ大江の千里あやまてり 鴈々

七ツの年天狗にとられけふの月 同

名月や是にもみてり歌袋 晩器

盛る舛も三五十五の夜始 屠竜

漁民が花礫亭で客人に三弦を弾いてもてなし、句会にも参加していたのである。屠竜とは抱一のこと、この句会を催した人物であった。また、其爪は後に俳諧の宗匠となる人物であり、鴈々(二代目)は姫路藩家老で後に二世晩得となった。晩器は晩得の息子である。

漁民が入集する他の俳諧撰集として『続江戸月見』には墨河・秀民・雪弓とともに、『俳諧ひとしぐれ』では墨河・秀民・雪幣・巨園・青蘿・雪弓とともにその名が見える。そして『いとしぐれ』にも入集する。漁民は抱一といった大名の弟と関わるることによって影響を受け、俳諧が吉原者の仲間の間で浸透していったと言える。漁民は抱一を大名子弟の大切な客としてもてなし、『天の川』や『冬木立』にも抱一とともに入集し、密接な俳諧連中の繋がりを結んでいたと考えられる。

次に「いづみやのこゑん」は、早大本の書き入れに「忠兵へ」とあるところから明らかにするように、吉原仲の町、泉屋忠兵衛であり、俳号を「巨園」と称した人物であった。『軽拳館句藻』で抱一は巨園について三句詠んでいる。

巨園、七十の賀に

呑口をこれからひらけ七ツうめ (「椎の木蔭」寛政九年一月)

巨園、八十賀に

突ふるせ神の切けん此藜 (「かみきぬた」文化三年)

八十六翁巨園、身まかりける時

仙境の新酒呑にかいなければ (「放鶯処」文化十年八月)

抱一は巨園の賀を祝っているところから、巨園は抱一と深い関わりを持っていたと考えられる。『天の川』にも巨園は抱一とともに入集していた。これらから抱一は吉原仲の町で茶屋の主人達の主導的立場にいたことが分かってきた。また、存義側点者の初代在転の『歳旦帖』(安永六年刊)に入集する。他に『俳諧ひとしぐれ』『冬木立』『いとしぐれ』など存義に関わる俳書にその句が見え、漁民同様、巨園も存義側の人物として俳諧を行っていたことが明らかになる。

では吉原仲の町茶屋、いの字いせ屋の二代目伊勢屋九十郎こと「せいら」はどのような人物だったのだろうか。いせ屋も抱一がひいきにしていたことが『軽拳館句藻』『梶の音』(寛政二年序)に見られる。また花咲一男氏『洒落のデザイン——山東京伝画「手拭合」——』によれば「せいら」を「翠羅(すいら)」とし、いせ屋では初代、二代にわたって俳諧を存義側点者の在転に付いたと指摘する。初代翠羅は墨河、秀民も入集した在転家集『露月菊』や在転編『歳旦帖』(安永六年刊)に入集し、この『歳旦帖』には他に巨園・雪弓・雪幣が同じ丁に入集し、他に米翁や存義側点者の鶏口・楼川・田女・買明・祇徳・小知・秀国らの句が見られる。また『古今吉原大全』巻三に「咲さくら簾あけたる美人かな」の句がある。ところで初代翠羅は花咲氏によると、天明二年の春頃死没したとされる。『俳諧ひとしぐれ』『天の川』『いとしぐれ』には「清羅」の名で入集する。『俳諧ひとしぐれ』は天明五年に刊行されており、『天の川』は寛政九年、『いとしぐれ』は寛政十年の刊行から考えると、『清羅』の名を用いるのが二代目と考えられるのではないだろうか。『通言総籙』の本文にも「いの字いせ屋のせいら」とあり、「清羅」を「せいら」

と読むことができることから、初代が翠羅、二代目が『通言総籙』に登場する清羅と推察できる。そこから考察すると『辛亥歳旦』に入集する「翠羅」は初代翠羅の句を取ったと考えられるのではないだろうか。また京伝とせいらの関係を見ると、京伝は初代、二代にわたっていせ屋に恩顧を受けていたようで、花咲氏は京伝が関連した黄表紙四種にいの字いせ屋の店頭を書き込んでいることを指摘する。『客人女郎』（山東京伝作画・天明三年刊）には店頭の様子だけでなく、いせ屋の女房と初代いせ屋主人が、いね屋女房おむね、いね屋九四郎として描かれる。また『客人女郎』では『通言総籙』にモデルとなった松葉屋瀬川を瀬山として登場させ、吉原の繁昌の様子をいせ屋ののれんがかかる場面で「其角は此里の夜見世を月夜かと見紛へしも、今に絶えせぬ繁昌は、げに御免しの色里なり」と江戸座のもとになった其角を出す。いせ屋を登場させる場面に其角をもつてくるのは、ただの偶然とは考えられず、江戸座俳諧に連なる連想を呼び起こさせる部分となっているのである。他にも、いせ屋の店先は「他不知思染井」（黒鷲式部（京伝妹）作・喜多川歌麿画・天明四年刊）、『通町御江戸鼻筋』（唐来参和作・北尾政演画・天明六年刊）、『江戸春一夜千両』（山東京伝作画・天明六年刊）に描かれる。京伝は自らの黄表紙にいせ屋を書き込むことによって京伝につとめたのである。『江戸春一夜千両』ではいせ屋が「中の丁の茶屋いの字伊勢屋」と実名で登場し、いせ屋の内部の様子が描かれる。そこには、京伝が天明四年吉原大火後の改装店開きに寄贈した助六の画賛が画中に描かれており、京伝画賛の「助六之図」と同じであることが判明する。この場面には「角丁の親方の所を惣仕舞にして」

と、先にあげた吉原角町の見番こと秀民も話に登場する。この作品ではいせ屋の紹介で遊ぶ息子の場合に、遊女みさ山のもとへ抱一と思われる人物が遊びに来ていたことも描かれていた。京伝といの字いせ屋せいら、秀民、抱一と一つの作品の中に吉原世界の縮図が描かれ、それぞれが密接に関連していたことが読み取れるのである。また花咲氏によれば、翠羅は「手拭合」の版下を書いた「筆工松月すいら」であつたことを指摘する。翠羅は「手拭合」の中にも図案を載せる。京伝が作中においていせ屋の宣伝を行い、「手拭合」では筆工として用いているところからも、いせ屋は墨河とともに京伝のパトロン的存在であつたと考えられる。二代にわたるいせ屋の主人は、京伝の吉原での遊興を助け、支援した人物の一人だつた。そして俳諧は初代、二代にわたって存義側の点者在転についており、そのいせ屋を抱一もまたひいきにしていたのである。

次に本文中に「いづゝ屋のせつべい」とある人物は仲の町茶屋おづつ屋主人、井筒屋孫次郎のことであり、俳号を雪幣と称した。親子で雪幣と号し、父の初代雪幣は、大籙「大上総」の主人であつた雀庵一麿の一周忌追善集『誰ため』（宝暦四年刊）に吉原連中とともに「日は西へ其名は残る高灯籠」の句で入集する。『誰ため』には他に存義を始め、楼川・買明など存義側の点者も入集し、十八大通の暁雨も句を寄せる。また『通言総籙』に登場する二代目雪幣は宝暦十年に秀国編の『ひるを見』に、安永三年には雪斎の歳旦帳の巻頭三つ物に脇をつける。他に在転編の「歳旦帳」（安永六年刊）や「俳諧ひとしぐれ」、「辛亥歳旦」に入集する。雪幣は、これらの俳書から親子二代にわたり浅草蔵前札差連の人々や存義側に近い存在だっ

たと考えられる。

そして、仲の町主人の最後に「おはりやせつ久」と出てくる人物は、早大本の書き入れに「雪弓は太郎兵衛」と示される人物で、仲の町茶屋おわりや主人、尾張屋太郎兵衛のことであり、俳号を雪弓と称した人物と考えられる。『古今吉原大全』、『歳旦帖』（在転編・安永六年刊）、『俳諧ひとしぐれ』、『いとしぐれ』、『続江戸月見』に入集する。これらの俳書から、雪弓も吉原者として俳諧を嗜み、存義側の点者についていたと考えられる。吉原仲の町茶屋の主人達は、吉原を媒体とすることによって俳諧を行い、存義側の宗匠に付いて句を詠み、抱一といった人物からも多分に影響を受けていたことが明らかになってきたと思う。

これら吉原仲の町茶屋の主人達が興じていた「梅枝点の俳諧」の点者となった梅枝とは、鶴屋抱えの遊女菅原の俳号であった。鶴屋は吉原京町一丁目、鶴屋忠右衛門の妓楼。菅原は天明七年秋の新吉原細見に鶴屋の屋三で一番の位置にその名が見え、天明朝に全盛を誇った遊女と考えられる。菅原については『傾城觸』（山東京伝作・天明八年刊）に

俳名を梅枝と云。

つよくはでに仕立べし。さつぱりとした句に高点あり。

書東江 俳諧

と記される。菅原は寛闊な気性で派手なことを好み、俳名を梅枝とした。諸芸には俳諧が挙げられ、さつぱりした句に高点があった。

菅原は遊女の中で俳諧を得意としたため、墨河の寮で行われた吉原連中の俳諧の点者になり得たのである。この『傾城觸』なる書は、『俳諧觸』の書名に擬し、その形式を借りて京伝が書いたものであることから、京伝が俳諧へ関心を持っていたことを伺わせる。しかし、俳書への入集は梅枝と思われる人物は管見の限り見当たらず、考察の余地を残す。

四 結び

これまで『通言総鑑』に登場する点取俳諧に参加した人物について考察を加えてきたが、石原徒流と吉原仲の町茶屋の主人たちを主とした俳諧流派を考えると、もつとも大きな分類として、江戸座存義側に属していたことが明らかになった。江戸座に関していえば天明二年に存義亡きあと、鶏口が江戸座で力を持ち、天明六年の『俳諧觸』では江戸座存義側が鶏口側と改称されるが、寛政元年には鶏口・小知・徒流が属する江戸座と百萬座、存義側に再び分裂する。

『通言総鑑』が刊行されたのが天明七年であるので、この作品における俳諧流派は鶏口ひきいる江戸座に最も近いものだったと考えられる。茶屋の主人達が入集する俳書には鶏口、小知、秀国も入集しているところから、これら吉原の茶屋主人達は江戸座鶏口に最も近い座側に属していたと考察できる。また『俳諧觸』によれば江戸座鶏口には、小知・秀国の他に茶屋の主人翠羅がついていた二世在転、さらに寛政元年から寛政九年まで石原徒流も同じ座側として鶏口についていた。ここに『通言総鑑』に描かれた点取俳諧に興じる茶屋

主人達の座と『俳諧鰯』に載る江戸座鶏口側の一致を見るのである。また十八大通として知られた人々の存在が大きく影響し、四時観連中との関わりも見逃せない。墨河、秀民がそれにあたり、秀民は特に『江戸の幸』や『俳諧ひとしぐれ』で左達、文魚といった十八大通の人々とともに俳諧を楽しんでいたのである。そして、吉原連中にとって指導的立場を示していたのが抱一と言えよう。茶屋の主人達は抱一からの影響も受け俳諧に親しみ、存義側の俳人、特に江戸座鶏口側の点者に師事したと思われる。『通言総籙』の本文でいえば、『宗匠のとりう』こと石原徒流は、茶屋の主人たちにとってそのような宗匠の一人だったと考えられる。それら存義側宗匠の上に抱一らの大名俳人からの影響があったのである。そして、京伝はこれら江戸座俳諧に関わる茶屋の主人を作品に登場させ、吉原連中の江戸座俳諧の流行を描くとともに、俳諧への興味を示しながら、自身はその江戸座のもとになった其角へ関心を示していたのである。京伝は吉原で発信された文化を洒落本の中に描きこんでいったのである。これまでは京伝は戯作者として狂歌連としての繋がりが重視されてきたが、吉原における俳諧連中の重要性について、江戸座存義側の俳諧を通じて位置付けがなされなければならない。今後、京伝のネットワークを俳諧交友の中で新たにとらえなおすことが出来よう。

注

(1) 早稲田大学図書館所蔵本は匡郭の上部空白欄に四十六に及ぶ書き入れがあり、書き入れの次第は巻末の識語によってうか

がわれる。三村竹清が大正五年一月、文行堂から通人の筆すきびと思われる書き入れのある『通言総籙』を借り、それを写したとある。さらに山口剛氏が昭和三年一月、竹清氏からこれを借り写したとされる。

(2) スキヤ連は鹿都部真顔が作っていた狂歌連で、真顔はまた恋川好町という黄表紙・洒落本作者でもあった。他にも黄表紙・洒落本作者恋川春町は酒上不埒という狂歌名を持ち、板元の葛屋重三郎も吉原連の狂歌連中であつた。黄表紙作家と狂歌連は繋がりがあう関係にある。

(3) ただし京伝と俳諧の関係について述べたものに、肥田皓三氏『山東京伝の俳句』（『伝記』一輯所収 昭和五年九月、日本書誌学大系五五『上方学藝史叢攷』青裳堂書店、昭和六三年に再録）などがあるが本論とは関わらない。

(4) 花咲一男氏『柳沢信鴻日記覚え書』（三樹書房、平成三年）の指摘による。

(5) 『俳諧鰯』十八編に見られた「楠部秀瓠」は、『俳諧鰯』十一編、十三編には「緑樹庵 楠部秀瓠」として徒流と同じ江戸座鶏口側に加わっており、徒流が『俳諧鰯』十四編で「徒流一側 石原徒流」となると徒流の座側に入る。その後も『俳諧鰯』十五編、十七編に「徒流一列」として登場し、『俳諧鰯』十八編で徒流の名は見えないが、「徒流一列 楠部秀瓠」として登場し、徒流の座側に加わった人物であつた。

(6) 花咲一男氏『柳沢信鴻日記覚え書』（前掲）の指摘にあるように、発句を請われたのは柳沢信鴻（大和郡山藩主）である。

柳沢信鴻は米翁と号して江戸座系の俳諧に遊び、抱一と俳諧に興じた。致仕後、染井山荘で俳諧の句会を催し、大名俳人である抱一の兄銀鷺や江戸座宗匠である在軒などが出入りしていた。大名俳壇の重鎮であるとともに、俳諧師には経済的援助や、点取宗匠主催の句会の点者幹旋など句会運営も援助も行った。

『秋の声』は一世徒流の追善忌集である。ここには、文政九年の仲秋と記した序文がある。又、『秋の声』には一世徒流が文化元年に書いた「閑窓随筆」があり、その時徒流は七十歳であった。そこから、文化元年から文政九年の間に徒流は亡くなったと考えられる。また詞書に命日は「八月九日」とあり、蕉堂において、二世徒流によって法会が営まれ、そこで追善句が詠まれたものと思われる。

抱一と京伝の関係を考えると、抱一は「杜綾」と号して京伝の『客衆肝照子』（天明六年刊）に漢文序を寄せ、『手拭合』（天明四年刊）にも図案を寄せる。京伝は杜綾を鷹狩り用の鷹を図案にした手拭の図に「御記文は書顯されとも能ある鷹の御趣向は自かくれなし 京伝敬述之」と特別扱いで載せている。抱一と京伝の交流は吉原遊興がもなったものと思われる。

井田太郎氏「安永期の酒井抱一の活動——新紹介資料『四時菴丁酉年籠三百韻十五評』『高点如面抄』（丁・戌・巳集）をめぐって——」（『近世文学研究と評論』五八号、平成一二年六月）の指摘。抱一は『軽拳館句藻』『千束の稲』文化元年六月で墨

河のことを「先の五明楼主人は、予が古き俳かいの友たり」と呼んでおり、さらに墨河の娘となの鯉に來た養子に抱一は墨渡という俳名を与えている。

(10) 『洒落のデザイン——山東京伝画『手拭合』——』（谷峯藏・花咲一男著、岩崎美術社、昭和六一年）花咲一男氏の解題の指摘による。

(11) 花咲一男氏「柳沢信鴻日記覚え書」（前掲）の指摘によれば、『風月集』六卷、『江戸の幸』に入集する「徒疏」は石原徒流とは別人である。在軒編『露月菊』（安永七年刊）には「大城守る身」とあり、『江戸の幸』に描かれた「徒流（徒疏の誤記か）」の姿も袴をまといっており、旗本勤めをしていた武士であつたと推定される。

(12) 井田太郎氏「抱一の江戸の表象——都市の中の其角——」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』四六輯、平成一三年二月）の中で、これら寛政八年の抱一を囲む其角・鷹々・晩器などは其角を深く慕い、抱一の其角への傾倒を一層強めたと推測する。

(13) 『洒落のデザイン——山東京伝画『手拭合』——』（前掲）によれば、天明二年春細見の「伊勢屋九平治」の名が、同年秋の細見では「伊勢屋九十郎」と替わっていることから、初代翠羅が天明二年に死没したと推察する。

(14) 小池藤五郎著『人物叢書 山東京伝』（吉川弘文館、昭和三六年）一八一頁に指摘。

(15) 綿屋雪著・花咲一男補「上総屋一鷹」（花咲一男著『江戸あら

かると』所収 三樹書房、昭和六一年）の指摘。雀庵の俳諧は才麿系逸志門（逸志も吉原の娼家巴屋の養子）で晩年心祇に師事した。追善句を寄せているのは、吉原連中や祇徳・心祇ら四時観連中のほか存義・紀逸ら江戸座諸派、五色墨、役者や芸能関係者といった人々が入集する。

〔付記〕

『通言総籙』の本文は『新日本古典文学大系85』（岩波書店、平成二年）、『廓大帳』の本文は『洒落本大成 第十五巻』（中央公論社、昭和五七年）、『客人女郎』、『江戸春一夜千両』の本文は『山東京傳全集 第一巻』（ぺりかん社、平成四年）によった。なお、引用文には句読点・濁点・傍線を私に付した。本稿は平成一六年六月の日本近世文学会春季大会（於東洋大学）での口頭発表に修正を加えた。本稿をなすにあたってご教示賜りました棚橋正博氏、加藤定彦氏、二又淳氏、井田太郎氏に心より深謝申し上げます。

（かしま みさと・北海道大学大学院博士課程）